

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第 72 回

『「歴史を通して人物を語る」 vs 「人物を通して歴史を語る」
～ 時代を動かす ～』

2021 年 8 月 28 日 (土) 13:00－17:35、『南原繁研究会』の Zoom 開催による「第 10 回 夏期研究発表会」に出席した。 プログラムは、下記の如くであった。

第 1 部 司会 秋間修

13:00～13:05 開会挨拶 秋間修

13:05～13:35 近藤信和「2020 年に会ったキリスト教」

13:35～14:05 山口周三「南原繁とヒルティ」

14:05～14:35 高橋幸輝「経営者のためのリベラル・アーツ入門：付プラトンとの出会い」

14:35～15:05 沢目健介「小野塚喜平次研究(2)」

(15:05～15:25 休憩)

第 2 部 司会 榎木憲一郎

15:25～15:55 吉馴明子「北海道開拓殖民前史―空知集治監の市来知開拓」

15:55～16:25 川口雄一「第1次世界戦争期におけるB・ラッセルの政治哲学——南原繁の「正義」論の形成に関する予備的考察」

16:25～16:55 田淵舜也「「政治哲学」と「絶対弁証法」：当為と歴史をめぐって」

16:55～17:30 総括ディスカッション(当日は、報告者の各発表の最後に、質疑応答)

17:30～17:35 閉会挨拶 樋野興夫

筆者は、『南原繁研究会』代表として、「閉会挨拶」の機会が与えられた。「内容の豊富な、純度の高い発表会であった」と語った。 本当に日々勉強である。

『「歴史を通して人物を語る」 vs 「人物を通して歴史を語る」どちらが 教養的なのか?』、今回の発表会で、何故か 頭の中に過った。 筆者の恩師は、南原繁(1889-1974)が、戦後最初の東大総長のときの学生で、「スケールの大きい、愛情豊かな人物だった」と、南原繁の話を よく聞いたものである。「時代を動かすリーダーの 清々しい胆力」としての「人間の知恵と 洞察とともに、自由にして 勇気ある行動」(南原繁 著の「新渡戸稲造先生」より)が 鮮明に蘇

る 今日この頃である。 「はしるべき行程」と「見据える勇氣」を持って、ブレない人物『内村鑑三（1861-1930）、新渡戸稲造（1862-1933）、南原繁、矢内原忠雄（1893-1961）』は、まさに「コロナ時代」の学びの対象では なかろうか！